様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月３０日現　在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18330149
研究課題名（和文）　子どものロールシャッハ法に関する包括的研究

研究課題名（英文）
A Comprehensive Study of The Rorschach Method for Children

研究代表者
松本　真理子　(MATSUMOTO MARIKO)
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・教授
研究者番号：80229575

研究成果の概要：
子どものロールシャッハ法に関する多角的視点からの研究を包括することによって、現代に生きる日本人一般児童のパーソナリティの特徴が解明され、また日本における被虐待児の心理的特徴も明らかにされた。さらに脳画像と眼球運動という生理学的視点からも子どものロールシャッハ反応の意味するものについてアプローチした結果、国内外において初の知見が得られ、さらに発達障害児との比較などについて、現在、研究を継続中である（平成 21 年度～25 年度科学研究費基盤研究（B）（課題番号 21330159）にて継続）。
これまでに得た知見は国内外の学会および論文として既に発表している。平成 21 年度中には図書として成果の一部を刊行する予定である（2009 年 9 月刊行予定）。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
２００７年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
２００８年度	3,100,000	930,000	4,030,000
総　計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：子ども、ロールシャッハ法、
心理援助、脳画像

１．研究開始当初の背景
日本における子どものロールシャッハ法に関する研究は、1950 年代の大規模な一般児研究以来、乏しい現状にあり、基礎研究、臨床研究と応用研究を含めた包括的研究によって、今後の発展が期待されたことが本研究の背景にある。

２．研究の目的
子どものロールシャッハ法について、発達的基礎研究、臨床研究、応用研究および脳画像研究（生理学的研究）という多角的視点による包括的研究を行い、ロールシャッハ法による心理援助への貢献のあり方を提示することを目的とする。

３．研究の方法

①発達的基礎研究
　幼稚園（5歳児）、小２・４・６年生および中学２年生の一般児童を対象として、個別ロールシャッハ法を実施し、有効データ数 436 名について解析を行った。
②臨床研究
　被虐待児のロールシャッハ反応について一般児童のそれと比較した。
③応用研究
　簡易型ロールシャッハ法について、中学生を対象とした質問紙によるメンタルヘルス調査の結果との比較を行った。
④脳画像研究
　中学生一般児と発達障害児を対象として、ロールシャッハ法、ＰＦスタディとＴＡＴ実施中の眼球運動およびＮＩＲＳ測定を実施し、比較検討する。現在測定は継続測定中である。

４．研究成果
①発達的基礎研究
　結果は現代に生きる日本の子どもの心理学的特徴として、国内外の学会発表と英文論文発表を行った。結果の一部は平成 21 年度中に図書として刊行予定である。
　以下に主な結果を示す。

1）日本人一般児童のロールシャッハ反応

(Application of Rorschach for Japanese Children(1):What The Rorschach forJapanese Children XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)発表)

対象：東海地方の公立小学校 4 年生 99 名（男子 56 名、女子 43 名）、小学 6 年生 95 名（男子 47 名、女子 48 名）の計 194 名

調査方法：保護者および本人の同意を得た上で，空き教室で個別にロールシャッハ法を実施した。検査時間は 1 名につき 20～40 分間であった。検査者は臨床心理士で経験 2 年以上の者が行った。解析は包括システムに準じ，スコアリングは 3 名の臨床心理士が実施，スコアリングの一致率において十分信頼のできるものであった。

結果：　図 2～4. は反応数（R），F%とＥＡの平均値および諸外国データとの比較を示している。反応数にかかわらず，日本人児童は特に米国人児童に比較して，顕著なＥＡの低値と F%の高値を示している。背景には時代・文化や社会的要因も大きいものと思われた。

　ロールシャッハ法は心理アセスメントのツールとしてだけでなく、時代比較や国際比較を含めた大規模な発達的基礎研究のツールとしての有効性を強調した。

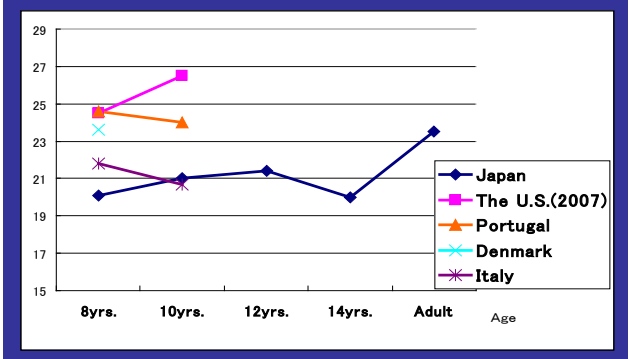

Fig2. International Comparison of R

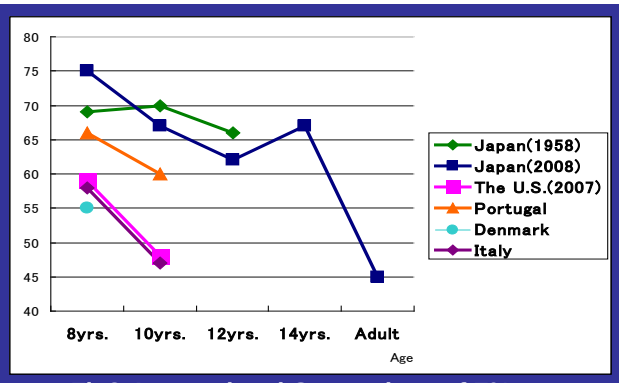

Fig3. International Comparison of F%

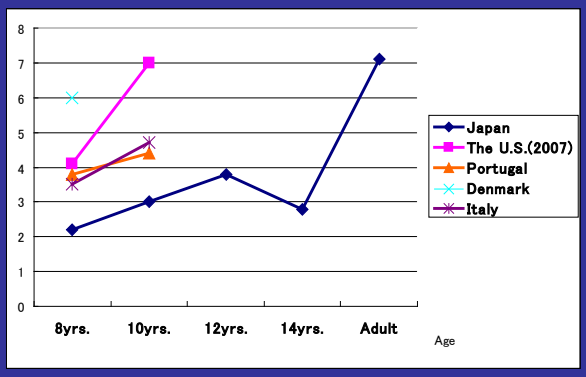

Fig4. International Comparison of EA

2）日本人児童の感情カテゴリーについての考察

(Application of Rorschach for Japanese Children(3):The Study on Affective Symbolism of Rorschach Responses
XIX International Congress of Rorschach

and Projective Methods (Belgium Leuven)発表)

対象：Child グループ（６年生）85 名，Early Adolescence グループ（８年生＝中学２年生）100 名，Late Adolescence グループ（大学生および専門学校生、年齢は１８歳から２５歳）100 名
方法：個別実施したロールシャッハに対して，名大式 Affect カテゴリーによる分類を３名の臨床心理士で行った。各サブカテゴリー%を指標として算出し、年代別の３群を比較した。
結果：最近の子どもたちの感情体験は青年期や大人と比べてやや希薄であることが示唆された。思春期においては、敵意あるいは攻撃的な感情が優勢を占めているが、青年期を通じてそれは減少していった。結果より,反抗期を経た後に、人間関係の基盤としての依存感情が育っていくことが考えられた。性差では男子はより多くの Unpleasant Feeling 特に hostility を体験しやすく、女子はより多くの Positive Feeling を体験しやすいことが示された。

子どもたちが自分の感情に気づいたり、関心をもてるような環境が必要であることが示唆された。

3）対人交渉方略とロールシャッハ反応

(Application of Rorschach for Japanese Children (4)： Relationship between Rorschach and development of Interpersonal Negotiation Strategies
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)発表)
目的：社会性の一側面である対人葛藤が生じた際の場面解決方略に焦点をあて、Selman 理論に基づく対人交渉方略(Interpersonal Negotiation Strategy 、以下 INS)と子どものロールシャッハ反応との関係を検討する。
対象:実施総数は 3 学年 176 名であった。全員、公立小中学校の生徒である。
方法： INS 質問紙（集団）と個別にロールシャッハ法を実施した。
結果：他者変化得点が高く、自己変化得点が低いデータを「他者変化群」とした。この群には、50 データが該当した。また他者変化得点が低く、自己変化得点が高いデータを「自己変化群」に分類した。この群には 44 データが該当した。

発達的には 6 年生で他者変化群がもっとも多く、中２では自己変化が増加し、特に自己変化における葛藤を回避する反応が増加することが示された。

両群におけるロールシャッハ変数との関係について、反応数は他者変化群が自己変化群より多く、また自己変化群の値の方が一般児童全体の平均値に近似していた。

Afr は自己変化群が他者変化群より高く、また自己変化群の値の方が一般児童全体の平均値に近似していた。

対人知覚クラスター変数に有意差は認められなかった。自己変化群は受動的な関係か相互関係のない単なるペア反応が多かった。また他者変化群は、例えば踊っている、荷物を持っているなどの活動的な関係を示す反応が認められた。

②臨床研究

結果は学会発表および論文として発表した。以下に主な結果を示す。

1）ロールシャッハ法の各変数と被虐待児の問行動との関連

(Application of Rorschach for Japanese Children(5)： Correlation between the Rorschach variables and the behavior problems of children who have been abused
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)発表)
対象
被虐待群：児童福祉施設に在籍中で虐待を受けたことが明らかな子ども 56 名。日本では性虐待が表面に現れにくいため、今回の対象からは除外した。
対照群：一般児童生徒から年齢と性別をマッチングさせた 56 名を対象とした。
方法：個別にロールシャッハ法および CBCL（Child Behavior Checklist）を実施した。
結果： 被虐待児のロールシャッハ反応では、色彩への反応性の高さと、自己の傷つきや損傷感が特徴として挙げられる。

CBCL 内向尺度得点は R の少なさに示される生産性の低さに関係していることが明らかになった。また、An と MOR は一般群との比較でも、被虐待児の特徴的な変数であることが確認されており、さらに CBCL の問題行動との関連が深いことが明らかとなった。したがって臨床場面では、これらの変数を注意深く検討する必要があるものと思われた。

③応用研究

結果は、学会発表した。以下に主な結果を示す。

1） ロールシャッハ図版を用いた子どもの対人関

係能力測定に関する研究-簡便型心理測定

（「ロールシャッハ図版の刺激特性に関する研究 - 簡易型心理測定システムの開発（第3報）」日本心理学会第70回大会　発表）

対象：被検者は，公立中学校２年生 242 名。

方法： SRT（簡便型ロールシャッハ法）はロールシャッハ図版のⅡ，Ⅲ，Ⅶを縮小印刷した用紙に，領域と反応を記載し，さらに図版Ⅲについては TAT に準じた簡単な物語記述を求める質問から成るものである。この検査を集団実施した。同時に被検者に対する学校場面での不適応的な問題について教師評定を行った。対人関係能力不全指標について統計的検討によって２段階の条件を設定し，条件を満たす者を不全群としてさらに MOA 評定を行った。

結果：対人関係能力不全群には 43 名（18%）が該当した。そのうち第２段階の条件をすべて満たす者は 21 名（S　群）であり，３つのうち２つの条件を満たす者が 23 名であった(O 群)。

また，MOA 評定の結果 S 群に病理レベルの反応が多く，血液反応の多さなど S 群は対人関係において攻撃的で葛藤を生じやすいことが示唆された。一方，O 群は MOA にチェックされない者が多く，受動的な一群であることが示唆された。

以上の結果より，SRT が集団場面での簡便な対人関係能力のスクリーニング方法として有効であることが示された。

④脳画像研究および眼球運動に関する研究

結果は国際学会において発表し、現在その一部を英文論文として投稿中である。以下に主な結果を示す。

ロールシャッハ法と他の投映法実施時における脳の活性領域の違いについて

（Difference of Brain activity between Rorschach Method and other projective methods: a NIRS study

XIX　International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)　発表）

目的：心理検査では、答えが導き出される際の脳内過程が、ほとんど明らかになっていない。そこで、ロールシャッハとそれ以外の投映法による脳活動領域の違いを近赤外分光法により調べた。

対象：参加者は 21 人の定型発達児で 12 歳から 15 歳であった。

方法:課題にはご覧のロールシャッハ４枚、TAT2 枚と PF-study3 枚の図版を用いた。脳活動計測は日立メディコ社製のニルス ETG-100 を用いた。サンプリングレートは 10 ヘルツ、すなわち 100 ミリセコンドに一回で、測定部位は前額部、すなわち、前頭前野(PFC)を測定部位とした。

結果：ロールシャッハ、TAT が右半球、PF-study が左半球での活動が盛んであることが示された。分散分析（ANOVA）の結果、ロールシャッハと PF-study の間にのみ有意差が認められた。

Warrington(1985)が物体認知における神経機構として、両目から入った視覚情報が視覚野で処理されたあと、右半球で知覚情報が処理され、その後、左半球に送られて意味情報が処理されるというモデルを提唱している。本実験の結果、ロールシャッハテストにおいて右半球での活動が有意であったことは、まさにロールシャッハテストの創始者であるヘルマン・ロールシャッハ(1921)がこのテストを指して形態判断実験である、としたことを改めて支持するものであろう。

本研究では前頭前野活動の左右差を調べたのみであり、今後は性差、障害の有無（特に、自閉症における顔認知など）による脳活動の差を検討する予定である。

また同時に測定している眼球運動に関しては現在継続測定中であり、成果の一部は 2009 年度日本心理学会（8 月）および日本ロールシャッハ学会（10 月）において発表予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

1. Matsumoto,M.　Suzuki,N.　Shirai,H.
Rorschach Comprehensive System data for a Sample 190 Japanese Nonpatient Children at Five Ages
Journal of Personality Assessment
89, Supplement,S102-S113,　(査読有)
平成19年11月

2. 坪井裕子、森田美弥子、松本真理子「被虐待体験をもつ小学生のロールシャッハ反応」心理臨床学研究25（1）13-24
平成19年4月（査読有）

3. Nakabayashi,M.　Matsumoto,M.：「Psychological Tests and Asperger Syndrom:The Association with Continuous Facilitative Support」
Japanese　Journal of Child and Adolescent　Psychiatry, 46、Supplement, 1-15,（査読有）
平成 19 年 1 月

4.Matsumoto M.「Responses of Japanese Nonpatients Children to the Rorschach Test: A Developmental perspective」Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 45、Supplement 65-80（査読有）
平成18年5月

〔学会発表〕（計 15 件）

1. 畠垣智恵、松本真理子、森田美弥子、鈴木伸子、坪井裕子、白井博美
心理検査課題に対する反応にみる現代の子ども像-1950年代との比較から -
第5回子ども学会, 平成20年9月28日

2. 平石博敏、松本真理子、早川典義、猪俣誠司、松本英夫、灰田宗孝
Difference of Brain activity between Rorschach Method and other projective methods:a NIRS study
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

3. 白井博美, 松本真理子, 森田美弥子, 鈴木伸子, 坪井裕子, 畠垣智恵、
Application of Rorschach for Japanese Children(6):Analysis of mother-child interaction using Consensus Rorschach Test
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

4. 坪井裕子, 松本真理子、森田美弥子, 畠垣智恵, 鈴木伸子, 白井博美
Application of Rorschach for Japanese Children(5):
Correlation between the Rorschach variables and the behavior problems of children who have been abused
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

5. 畠垣智恵、松本真理子、森田美弥子、鈴木伸子, 坪井裕子, 白井博美
Application of Rorschach for Japanese Children(2)Examination on the protocols with less than 10 responses
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

6. 鈴木伸子, 松本真理子、森田美弥子, 坪井裕子, 白井博美, 畠垣智恵
Application of Rorschach for Japanese Children(4):
Relationship between Rorschach and development of Interpersonal Negotiation Strategies
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

7. 森田美弥子、松本真理子、坪井裕子、畠垣智恵他 計6名
Application of Rorschach for Japanese Children(3):The Study on Affective Symbolism of Rorschach Responses
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

8. 松本真理子, 白井博美, 森田美弥子, 鈴木伸子, 坪井裕子, 畠垣智恵
Application of Rorschach for Japanese Children(1):What The Rorschach for Japanese Children
XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods (Belgium Leuven)
平成20年7月22～25日

9. 坪井裕子, 松本真理子、森田美弥子, 畠垣智恵, 鈴木伸子, 白井博美
「子どものロールシャッハ法に関する研究 - 被虐待児の問題行動とロールシャッハ法に現れる特徴との関連」 -
日本ロールシャッハ学会第11回大会
平成19年11月24日

10. 白井博美, 松本真理子、森田美弥子, 坪井裕子, 畠垣智恵, 鈴木伸子
「子どものロールシャッハ法に関する研究 - 幼児における反応内容の特徴 - 」
日本ロールシャッハ学会第11回大会
平成19年11月24日

11. 鈴木伸子, 松本真理子、森田美弥子, 坪井裕子, 白井博美, 畠垣智恵
「子どものロールシャッハ法に関する研究 - 対人交渉方略の発達との関連 - 」
日本ロールシャッハ学会第11回大会
平成19年11月24日

12. 松本真理子, 白井博美, 森田美弥子, 鈴木伸子, 坪井裕子, 畠垣智恵、
「子どものロールシャッハ法に関する研究 - ロールシャッハ法の意味するもの―」
日本ロールシャッハ学会第11回大会
平成19年11月24日

13. 畠垣智恵、松本真理子、森田美弥子、鈴木伸子, 坪井裕子, 白井博美
「子どものロールシャッハ法-少ない反応数のプロトコルについての検討―」
日本心理臨床学会第26回大会
平成19年9月27日

14. 森田美弥子、松本真理子、坪井裕子、畠垣智恵他 計6名
「名大式ロールシャッハ法「感情カテゴリー」から見た青年期の特徴―中学生と大学生の比較―」
日本心理臨床学会第26回大会
平成19年9月27日

15. 栗本英和、浅野晋平、松本真理子、青木紀久代
「ロールシャッハ図版の刺激特性に関する研究 - 簡易型心理測定システムの開発（第3報）日本心理学会第70回大会
平成18年11月5日

６．研究組織

(1)研究代表者
松本 真理子 (MATSUMOTO MARIKO)
名古屋大学・
発達心理精神科学教育研究センター・教授
研究者番号：80229575

(2)研究分担者
森田 美弥子 (MORITA MIYAKO)
（名古屋大学・教育発達科学研究科・教授 ）
研究者番号：80210178
栗本 英和(KURIMOTO HIDEKAZU)

（名古屋大学・評価企画室・教授）
研究者番号：40144125
青木　紀久代（AOKI KIKUYO）
（お茶の水女子大学・人間文化研究科・准教授）
研究者番号：10254129
松本　英夫（MATSUMOTO HIDEO）
（東海大学・医学部・教授）
研究者番号：90199886
灰田　宗孝（HIDA MUENTAKA）
（東海大学・医学部・教授）
研究者番号：20208408
坪井　裕子（TSUBOI HIROKO）
（人間環境大学・人間環境学部・准教授）
研究者番号：40421268
鈴木　伸子(SUZUKI NOBUKO)
（常葉学園大学・教育学部・准教授）
研究者番号：70387497

(3)連携研究者
なし